

2. 松尾頭4区の発掘調査概要報告

—妻木晩田遺跡第16次発掘調査（重点調査）—

はじめに

松尾頭地区4区の発掘調査は、重点調査長期計画第1期、短期計画第3期に相当し、松尾頭地区でおこなう初年度の重点調査である。調査面積は約1,100㎡である。

松尾頭地区は、平成7（1995）年度の第1次発掘調査において、大型の庇付掘立柱建物、玉作関連遺構、破鏡、絵画土器など特殊な遺構、遺物が検出されたことなどから、階層的に上位の集団が居住した区域と想定されている。松尾頭地区における重点調査の目的は、この「首長層居住域」と目されるエリアの集落構造を明らかにすることである。なお、松尾頭地区の調査区は、第1次発掘調査において1～3区が設定されているため、今年度の調査区を4区と呼称することにする。

1. 松尾頭地区の概要

妻木晩田遺跡は大きく4つの丘陵からなっており、松尾頭地区は「松尾頭北丘陵」上に立地する。松尾頭北丘陵は南西から北東方向にのびる丘陵であり、谷によってさらに北側（1区）と南側（2、3区）との丘陵に細分される。東側には松尾池が存在し、谷を隔てた北側には妻木山地区や洞ノ原地区が位置する晩田丘陵が接する。松尾頭地区の西側には、平成5（1993）年度に発掘調査がおこなわれた小真石清水地区が位置する。松尾頭地区とは広域農道で分断されているが、本来は同一の丘陵上に立地する。

松尾頭地区は、弥生時代中期後葉（IV-1期）に貯蔵穴がつくられ、他の地区に先駆けて集落の形成が始まる。続くIV-2期には妻木晩田遺跡でもっとも時期の遡る竪穴住居が1区に営まれる。以後、終末期まで集落は安定して継続する。

住居数が最大となるのは後期後葉（V-3期）である。この時期には、3区の南向斜面に大型の庇付掘立柱建物（第41建物跡）が存在する。また3区では、床面積が30～40㎡に達し、数度の建替え、拡張を経た大型の竪穴住居が2箇所分布する。これらのうち、丘陵頂部から北東側に下がった緩斜面に位置する住居（第45竪穴住居跡）からは破鏡が出土している。

後期後葉から終末期にかけては、生産関連遺構も確認されている。2区南向斜面に位置する終末期の住居（第31竪穴住居跡）からは碧玉剥片の接合資料、管玉未成

品が出土しており、玉作をおこなった遺構と考えられる。また3区に位置する3軒の住居について、焼土面の様相から鍛冶関連遺構の可能性が指摘されている（高尾2003）。

VI-2期には、1区に方形の墳丘墓が2基築造される。古墳時代初頭に集落はほぼ廃絶するが、古墳時代前期末～中期の住居が2区に1軒存在する。古墳時代後期には1区に横穴式石室をもつ円墳が築かれる。7世紀～奈良時代に再び集落が形成され、3区北東部の南向斜面に7軒の竪穴住居が営まれる。

2. 第16次発掘調査の概要

松尾頭4区は3区の西側に隣接し、南側丘陵の頂部（最高点の標高約109m）から南側にくだる斜面部および鞍部に位置する。

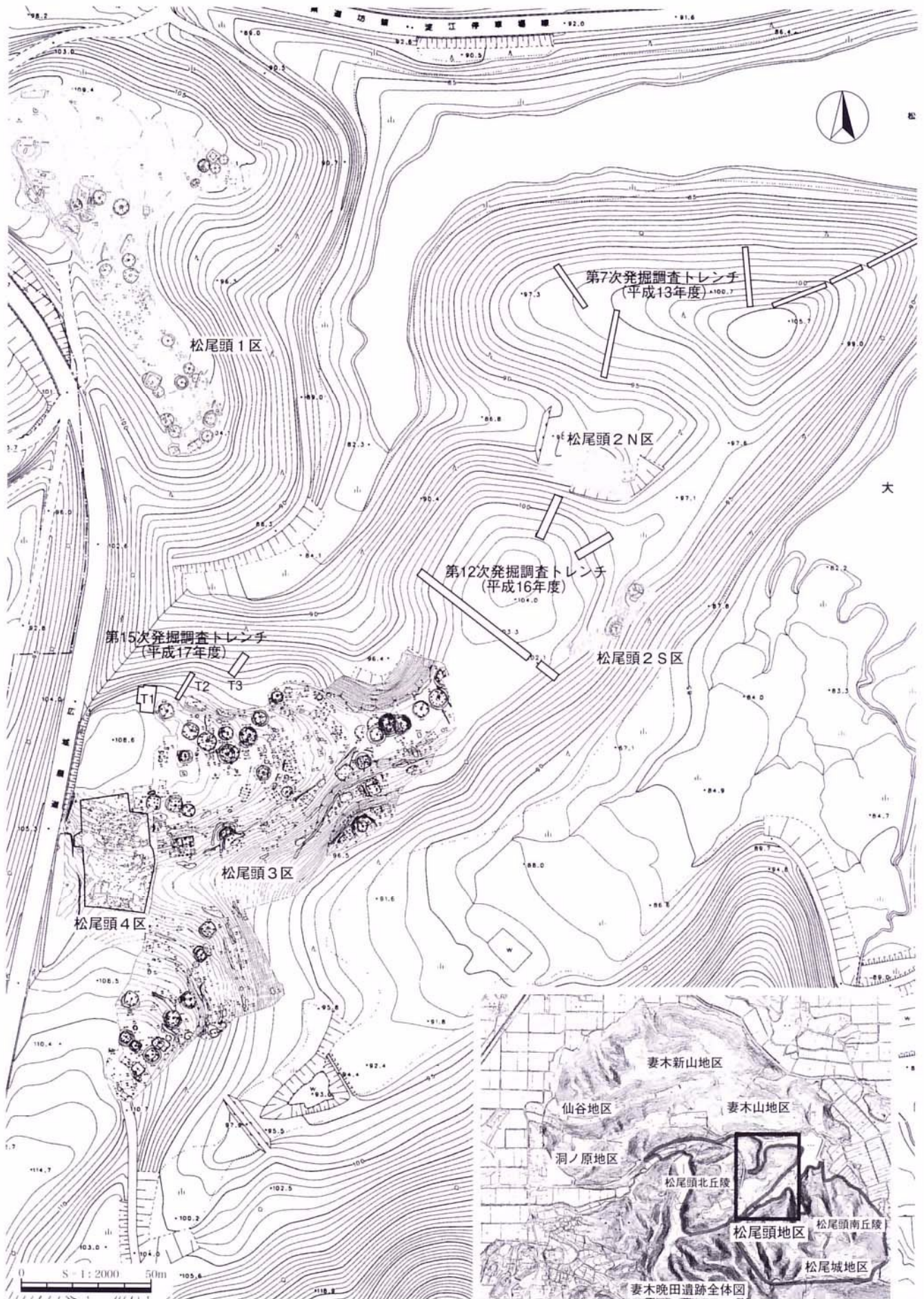
表土以下、弥生時代の遺構検出面までの基本層序は大きく3層に分けられ、上層から順に暗褐色土層（I層）、黒褐色土層（II層）、にぶい黄褐色土層（III層）である。各層とも弥生時代中期末から終末期までの土器が多量に出土したが、I、II層は7世紀代～奈良時代の須恵器をわずかに含む。II層は第15次発掘調査の各トレンチにおける③層（次節参照）に相当し、当地区の丘陵斜面に共通する堆積である。また鞍部付近のII層上面では、溝を3条検出した。等高線に直交して東西方向へのびることから自然流路である可能性が高い。出土した土器は小片であり時期を特定できないが、検出した層位から奈良時代以降の溝と判断される。III層はII層から遺構検出面への漸移層的な様相を示し、須恵器は含まない。III層下が弥生時代の遺構面である。表土から遺構面までの厚さは、堆積が最も厚い鞍部付近で約40cm、頂部に近い北側では5cm以下である。

弥生時代の遺構として、調査区の東側では、第1次発掘調査で検出された遺構の続きの部分を確認した（第12段状遺構、第53竪穴住居跡、第20・21溝状遺）。また、調査区中央から西側にかけて、新たに竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟を確認した。

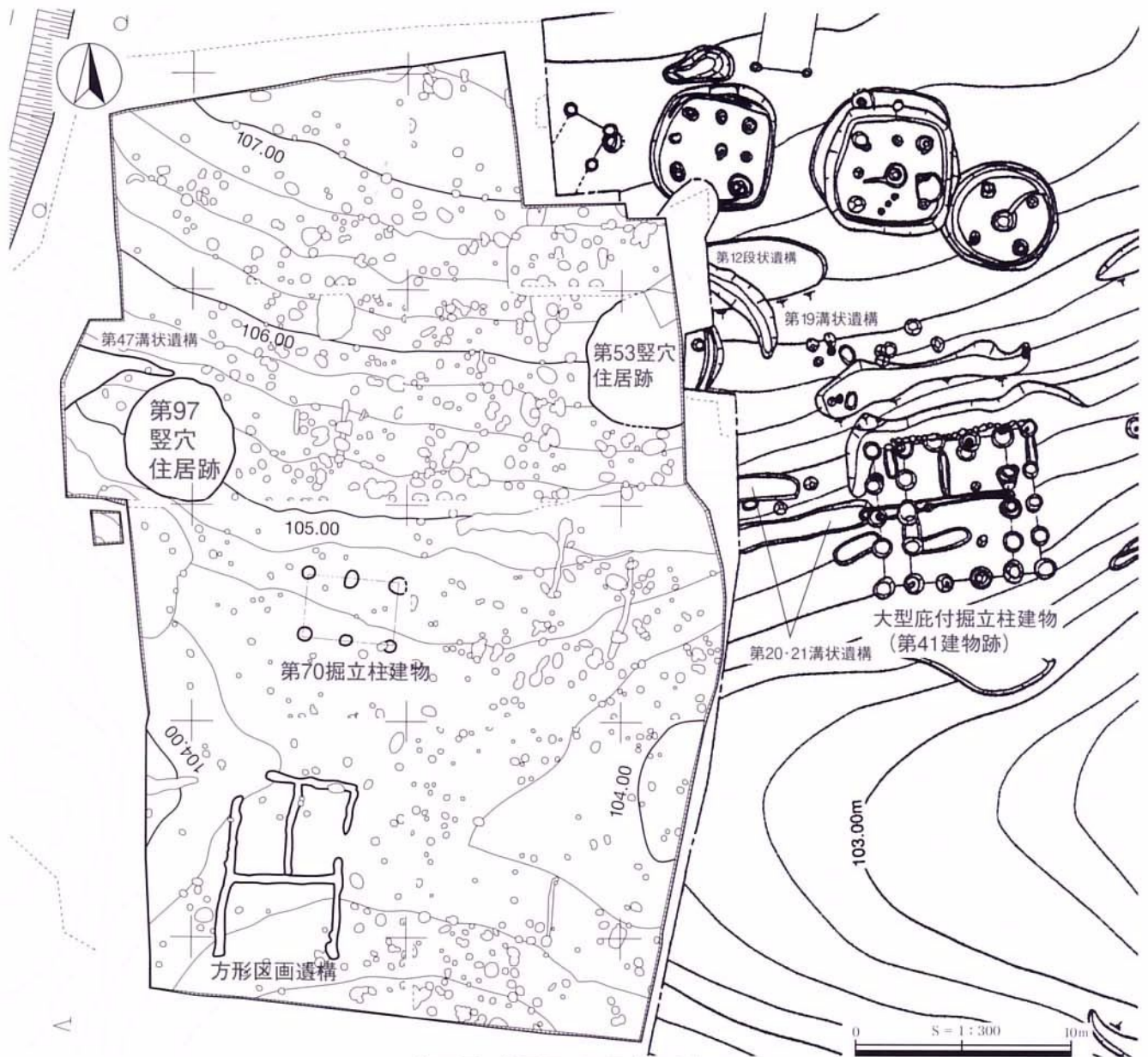
3. 竪穴住居跡の調査

第97竪穴住居跡（第4図）

今回の調査で新たに確認した住居跡である。調査区の



第2図 松尾頭地区調査区位置図



第3図 松尾頭4区調査区全体図

西側、標高 105 ~ 105.5 m の緩斜面に位置する。検出面での平面形は隅丸方形にやや近い円形を呈し、長軸 5.5 m、短軸 5.2 m、検出面から床面までの深さは最大で約 70cm である。床面は地山面をそのまま用いており、床の周囲には周壁溝が全周する。主柱と考えられる柱穴は 4 基であり、主柱の配置は方形となる。床面中央には長軸約 80cm、深さ 25cm の二段に掘られた中央ピットがあり、その北側には非常によく焼けた焼上面がある。

住居の埋土は灰黄褐色土、黄褐色土を主体とする。おおむねレンズ状の堆積を示しているが、下層の黄褐色土は地山土とよく似通ったローム質である。

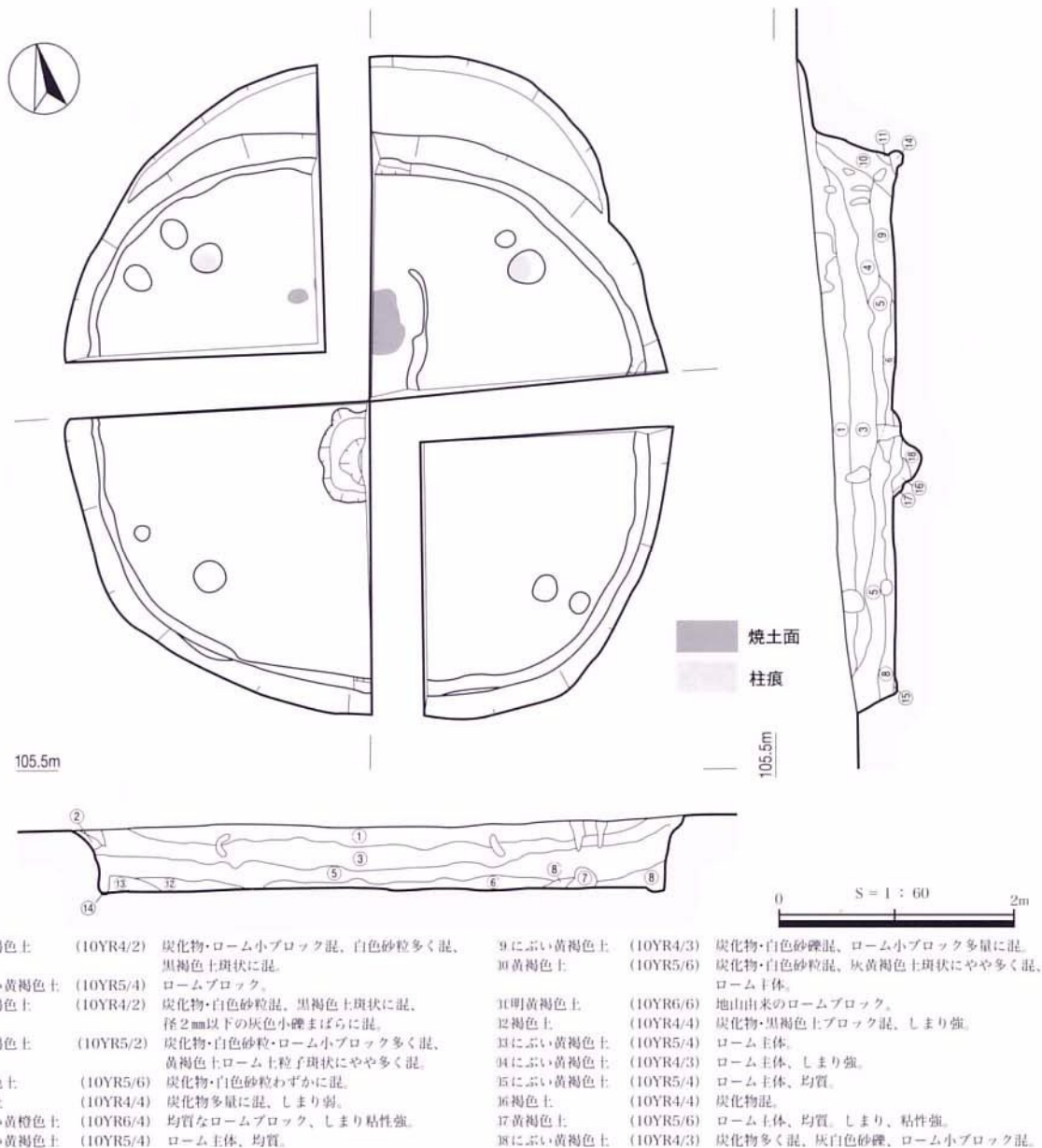
遺物は、床面直上から土器の他に緑色凝灰岩製管玉(第 5 図 3)、ガラス玉が各 1 点ずつ出土した。また、住居南側を中心とする床面上から、拳大~人頭大の礫が多数

出土した。礫には割れたものが 2 点あり、離れて出土した礫片どうしが接合した。使用痕跡は認められず、その性格については検討中である。

床面上から出土した土器の型式学的特徴から、この住居の廃絶時期は後期中葉~後葉と考えられる。

第 53 竪穴住居跡 (MGS1-53)

庇付大型掘立柱建物の北西約 8 m、標高 106 m 前後の緩斜面に位置する。北側には第 12 段状遺構が重複する。第 1 次発掘調査において住居東縁と周堤溝(第 19 溝状遺構)の一部が検出されており、今回残りの部分を調査したことで全体形を確認した。検出面での平面形は隅丸の五角形で、南北 6.5m、東西 6.6m、検出面からの深さは最大で約 70cm である。床面の周囲には周壁溝が全周するが、第 1 発掘調査既掘部分である東壁際から



第4図 松尾頭4区 第97 竪穴住居跡

南壁際にかけては二重に巡っており、部分的な拡張がおこなわれたものと考えられる。主柱と考えられる柱穴は各頂点付近に5基存在し、五角形の配置となる。東側の2基は拡張前の周壁溝より内側に位置している。床面の中央付近には径1.3m、深さ45cmの円形の中央ピットがある。中央ピットの周囲には、よく焼け締まった焼土面が大小5箇所以上存在する。

周堤溝は住居の北側に半円形に巡り、幅1.0～1.2m、深さ約15cmである。住居との間隔、すなわち想定される周堤の幅は1.1～1.6mである。段状遺構と重複するが、切り合い関係では段状遺構の方が新しい。

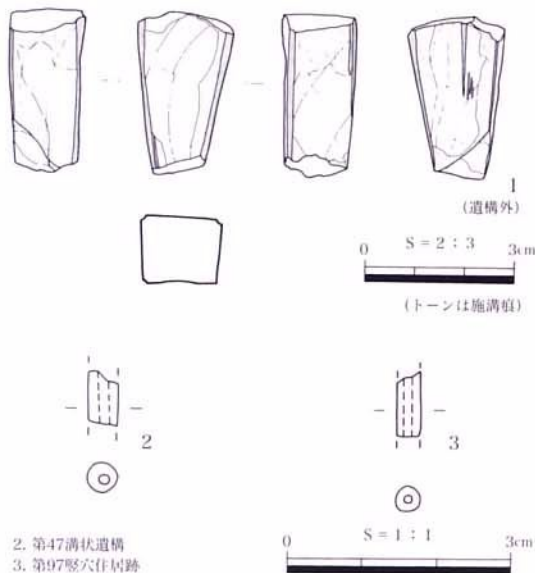
住居跡の埋土は暗褐色土を主体とし、最上層には基本層序II層の黒褐色土が堆積していた。埋土中からは鉄器12点、ガラス小玉5点の他に、V-3期の土器が一括

投棄された状態で多量に出土した。床面直上からは甕形土器が土圧で潰れた状態で出土した。第1次発掘調査では床面からV-3期の土器が出土したと報告されているが、今回出土した土器はやや古相の特徴を示すことから、住居の廃絶時期は後期中葉～後葉と考えておきたい。

4. 掘立柱建物跡の調査

第70 掘立柱建物跡

第97 竪穴住居跡から南東へ約6m離れた、標高104.5m前後の緩斜面に位置する。桁行2間、梁行1間の6本柱からなる掘立柱建物である。規模は桁行4m、梁行3mである。主軸の方向はW-9°-Nである。柱穴の径は60～80cmである。6本の柱穴のうち4本は二段掘りとなっており、検出面からの深さは55～90cmで



第5図 松尾頭4区出土遺物

ある。残る2本(南西隅、南側中央)は深さ20~35cmと浅い。すべての柱穴で径約20~25cmの柱痕を確認した。柱穴埋土中からは土器片数点が出土したがいずれも小片である。埋土上面から出土した土器がV-2期の特徴を持つことから、廃絶時期は後期中葉と考えられる。

5. その他の遺構

第97竪穴住居跡の北側で、東西方向の直線的な溝を1条確認した(第47溝状遺構)。幅約70cm、深さ約15cmで、埋土中からはV-2期の土器とともに、緑色凝灰岩製管玉(第5図2)1点が出土した。調査区南西の鞍部では、溝による方形区画遺構を確認した。溝の埋土からは弥生時代終末期の土器が出土している。類例に乏しい遺構であり、その性格については検討中である。また、多数のピットを検出したが、大部分は黒褐色土を埋土とするものである。これらについては、須恵器を含む基本層序II層と埋土が共通すること、III層上面からの掘り込みを確認できる例があることから、弥生時代より新しい時期の所産である可能性が高い。建物を復元できるものではなく、樹根痕も含まれているものと考えられる。

まとめ

「首長層居住域」の実態解明を目的として、大型庇付掘立柱建物跡(第41建物跡)の隣接地を調査した。その結果、首長の存在と直接的に結びつく遺構、遺物は発見されなかったが、集落構造を考えるうえでの手がかりとなる成果を得ることができた。

今回の調査では、第53竪穴住居跡の全体形を確認するとともに、新たに竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟

を確認した。これらは第41建物跡を含む「居住単位」(D群、高田2003)から空閑地を隔てて存在しており、これらとD群との関係をどのように捉えるかが問題となる。

また、第53竪穴住居跡が埋没する過程で後期後葉の土器が投棄されている状況を確認した。後期後葉の時間幅の中で住居の埋没が進行中であった点は、近接する第41建物跡の性格を考えるうえで重要な所見である。さらに、住居の埋没過程に関連して、第53竪穴住居と第97竪穴住居跡とは、埋土の色調や堆積状況、遺物の出土状況に対照的な様相が認められた。こうした状況は、自然埋没と人為的な埋め戻しといった埋没過程の違いを反映している可能性がある。集落景観の復元を図るうえで、埋没過程の類型化は有力な手段となり得る。これまでの調査成果により、最上層での黒褐色土の堆積の有無が、居住単位内での相対的な新旧関係を示すという傾向が示されている(馬路・瀧田2003)が、今後は中層・下層埋土の色調や土質、遺物の出土状況にも着目する視点が必要であろう。

出土遺物では、土器、石器、鉄器の他に、鞍部付近のII層中から水晶の原石が、また遺構面に接して施溝痕をもつ玉未成品(第5図1)が出土した。第1次発掘調査で検出された玉作関連遺構、第15次発掘調査で出土した緑色凝灰岩剥片(次節参照)とあわせて、松尾頭地区における玉作の様相を解明するうえでの重要な資料となり得るものである。

以上、集落構造に関して多くの成果を得ることができた。残された課題、新たに生じた課題については、来年度も継続しておこなう調査によって解決を図ることにしたい。

(君嶋 俊行)

【参考文献】

- 高尾浩司2003「妻木晩田遺跡における鉄器生産の一試論」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会
- 高田健一2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会
- 馬路晃祥・瀧田竜彦2003「妻木晩田遺跡における竪穴住居跡調査方針(案)」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会